レスターの報道量の変化

マスコミュニケーションゼミナール　1313002　秋元孝章

1.研究動機・研究目的

昨シーズンイングランドのフットボールのリーグであるプレミアリーグで奇跡が起きた。シーズンが始まる前はレスターの躍進を予想するものはごく少数だったが、多くの人々の予想を裏切って、最終的に優勝という結果を残した。筆者は長年「ワールドサッカーダイジェスト」を購読し続けてきたが、昨シーズン１年間を通してのレスターの報道量の明らかな変化に気が付いた。筆者が本雑誌を読み始めてから今まで、雑誌で多く取り上げられるのはプレミアリーグやスペインリーグやブンデスリーガなどの主要リーグの常に上位にいるチーム（レアルマドリード、バルセロナ、マンチェスターユナイテッド、バイエルンミュンヘン、ユベントス、パリサンジェルマンなど）に限られていたが、シーズンが中盤に差しかかったあたりから、急にレスターの戦術分析や選手個々のインタビューも載るようになった。このレスターの快進撃によって雑誌の内容がどう変わっていったのかに興味を持ち、この研究に至った。

15-16 シーズンが始まる前のレスターの注目度は低かった。それを示す指標としてオッズがあり、優勝倍率は 5000 倍であった。そこで、日本で最も多くの人に読まれているサッカー雑誌の「ワールドサッカーダイジェスト」を使って、日本においてのレスターの注目度を知る意味でも、躍進の軌跡を辿ろうと思いこの研究に至った。本研究は過去 2 年間に出版された「ワールドサッカーダイジェスト」を調べて、レスターにスポットを当てた記事（図や写真や表など）の量の変化を通して、レスターが 2 年間という短期間で、どのようにして優勝までたどり着いたのかを明らかにすることが目的である。

2.研究方法

レスターの躍進を紐解くにあたり、本研究では過去 2 年間に出版された「ワールドサッカーダイジェスト」を資料として用いた。各チームや選手の情報が数多く載っている中で、レスターの情報（図や写真や表）の量の変化を折れ線グラフにまとめた。調査に用いる雑誌は 1 号当たりの発行部数が 18 万部（2007 年調べ）で、日本で最も売れている日本スポーツ企画出版社の「ワールドサッカーダイジェスト」を参考資料として使用した。

この雑誌は隔週刊誌で月に 2 回発行されていて、基本的にはフォーメーション特集、CL 特集、代表チーム分析、などデータ的な物が多いのが特徴であった。その特徴を活かし、文章の部分は除外して図や写真や表などのデータだけを抽出して、そのデータの量の変化をもって、レスターの日本での注目度の変化と考えることとした。資料として用いるのは 14-15 シーズンの 11 月分から 16-17 シーズンの 11 月、つまり、現在に至るまでの 2 年分のバックナンバーで、計 48 冊であった。図や写真や表としてカウントするのはレスター

に関係するもののみで、それは選手だけでなく、監督やコーチや会長など、選手を取り巻く環境にまで及ぶものとした。

3.主な結果と考察

2016 年 4 月から 5 月にかけての一か月間が最も情報量の伸び率が大きいという結果になった。さらに、15－16 シーズンが始まる前の 4 月までの半年間、レスターに関する記事は 1 つもなかったが、シーズンが始まると 9 月に 0 を記録した以外は、安定した報道量を獲得したことが分かった。加えて報道量の変化はその月の試合の結果に左右されていたことも分かった。優勝した 5 月に最大値を記録し、最も勝ち点が獲れなかった 9 月に最小値を記録した。以上のことから、レスターの情報量の増加は一過性なものだったが、結果を残すことで下位のチームでも情報量が増えるといえる。

4.結論

レスターの報道量の増加から、例え普段は雑誌に載らないような弱小チームであっても結果さえ残すことができれば、雑誌で取り上げられる機会も自ずと増えるということが分かった。またチームとしての結果だけでなく、連続得点記録などの個人の記録が生まれたこともレスターの注目度を高めるのに一役買ったといえる。メディアとしても取り上げやすい話題性があったことが情報量の増加に繋がったと考えられる。

5.卒業論文の執筆を終えて

卒業論文の執筆にあたり、神原先生には多くの助言を頂きました。これだけ多くの字数の論文を制作するのは初めてで不安もありましたが、先生やゼミの仲間の助言もあり、無事に完成させることができたことをとても嬉しく思います。

最後に神原先生やゼミの仲間と過ごした時間は少なからず自分を変えてくれたと思います。このゼミナールで 2 年間活動していく中で得た経験を忘れずに、これからもあらゆることに探求心を持って過ごしていきたいと思います。